## 第5号の編集を終えて

人生は表現の連続である。それは無意識的なものから超越的なものに至るまで実に多様な形態を示す。紀要は研究活動の水準の高さと自己規律の厳しさを表現するものでありたい。出版費の高騰はその感を深くさせる。人文地理学第5号を上梓するにあたり，まずもって自ら襟を正す次第である。

第4号刊行以来すでに3年の年月が流れた。この間に人文地理学教室には第Ⅱ本館2,3階へ研究室の統合（48年3月）と人事移動を含む大きな変化があった。48年には4月から翌年3月まで河辺　宏は国連エキスパートとして Cairo Demographic Centre に出向，田辺　裕は 3～4 月にかけてブラジル，スペイン等へ出張。49年には2月に永田美保子事務補佐が大塚恒枝（旧姓高野）と交替，4月末には滝沢由美子助手が退官，代って5月から米田　巌が就任，ヨーロッパにおける農法の地域的比較研究に取り組んでいる。西川　治はマドリドにおける国際地図学会議に出席，西ドイツにおける2,3の新大学視察（4.26—5.19）。田辺　裕はバンコクにおけるユネスコ人口教育会議に出席（8～9月），総理府青年の船教官としてオセアニアへ出張（49.12～50.1）。50年には河辺　宏が人口問題研究所併任（4.1～9.30），つづいて同研究所へ配置換え（10.1），およそ10年間にわたる教養学部教官の職務から離れ，人口学の研究を中心に広く内外で活躍することになった。同僚時代の業績に感謝するとともに，なるべく早い機会に本学に人口学関係の講座が設置され，同氏の帰任を要請する日が来ることを切望してやまない。代って10月1日には山口岳志が北海道大学より助教授として着任，同氏は 38～39 年に本学部付置研究施設アメリカ研究センターの研究員を，その後はしばしば教養学科の非常勤講師を勤めた。専門は都市地理学と地域研究で計量的方法にも明るい。ビクトリア大学客員準教授の経歴もあり，国際的な活躍が期待される。

昭和50年4月は人文地理学分科（発足当時は文化人類学と併設）に第1回生を迎えてから20年になる。この秋に当教室創始者の木内信蔵名誉教授がアメリカ地理学協会の George Davidson 金メダルを受賞されたことは，われわれにとっても二重の喜びであった。日本地理学会の五十周年記念にも花をそえる慶事であった。

昭和51年の春を迎えて地球生態系の発展を祈り，その多彩なる地域的表現を対象とする人文地理学の創造的役割を自覚する次第である。本紀要の刊行にあたり多大の御支援いただいた本学部第三委員会，人文科学科，事務部に心からの御礼を申し上げる。

（西　川　　治）